
精密工学会生産原論専門委員会 第一回研究会（2025年5月15日） 「日本建築と大工道具～木のいのちを活かす道具と技～」

講演1 未来へ伝えたい匠の技と心

竹中大工道具館 館長 河崎 敦子 氏

竹中大工道具館について、紹介させていただきます。

この道具館、今は公益財団法人として運営されているのですけど、40年前は竹中工務店の企業ミュージアムとしてスタートしたのです。最初は道具も資料もほとんどなくて、「大工道具館を作るぞ！」って決めてから、道具や文献を一生懸命集めたのです。今では3万点くらいの資料があるのです。



竹中工務店というのは、1899年に神戸で創業された会社で、もともとは名古屋を拠点にしていた宮大工の棟梁の家柄なのですね。創業者は竹中五右衛門さん。二代目の方が「大工道具館を作りたい」って言い出して、宮大工の文化を後世に残すために資料を集め始めたのです。

西岡常一さんっていう、宮大工としてすごく有名な方がいらっしゃるのですけど、この方が道具館の設立当時、まだ現役で活躍させていて、資料提供などでも協力してくださったのです。西岡さんの言葉に「木を買わず、山を見て選ぶ」っていうのがあって、木材の性質を見極めて建築に活かすことの大切さを語っているのですね。

例えば、東大寺南大門の柱には、木が南側に枝を伸ばしていた痕跡がそのまま残っていて、木の成長方向を活かした設計がされているのです。これはまさに西岡さんの思想を体現したものですね。この竹中大工道具館の建物なのですが、森の中みたいな敷地にあるのです。ここは、実は大正時代に竹中工務店の本社があった場所なのですね。まだ従業員が30人くらいの小さな会社だった頃の話です。社長の家もこの敷地内にあって、本社が移転した後も、社長の住まいが残っていたのですけど、新神戸駅ができた時にそれもなくなって、今の建物が建てられました。



建物は、できるだけ木を切らないようにして、敷地の特徴を活かして作られているのです。地下はコンクリートなのですが、その中に伝統的な木造技術を組み合わせて、釘を使わずに木を刻んで組み上げる「船底天井」っていうのが、お客様を迎える場所にあります。柔らかな曲線を描いていて、すごく美しいのですよ。

館内は七つのコーナーに分かれています、「五感に響く」っていうのを大事にしているのです。実物の道具に触れられるような展示になっていて、手で触って体験できる「ハンドオン展示」もあります。例えば、



鉋（かんな）で削った木くずをためておいて、木の香りの違いを感じてもらうとか、そういう工夫がされています。

それから、動画も流しているのですけど、3分くらいの映像で、日本の伝統的な木造建築の技術や、大工道具の魅力を紹介しているのです。自然を活かした建築、匠の技と心を感じるミュージアムっていう感じですね。

大工道具の歴史っていうのも、すごく面白いですよ。

1943年、昭和18年に東京都大田区で「本格的な建築を作るには、何種類の道具が必要か?」っていう調査が行われたのです。その時に一人の大工さんが使っていた道具が、なんと179点! これだけの道具を持って仕事していたっていうのが、ちゃんと残っているのです。

明治から昭和初期にかけて、社会の発展とともに木造建築がたくさん建てられていて、みんな大工さんが手で作っていた時代なのですね。だから、手で使う道具がピークを迎えていたのです。

一番多いのは「ノミ」。刻んだり彫ったり、建築の精度を保つために、ノミが一番多かったのです。仕上げの精度を上げるための道具で、毎日研いで、使い分けて仕事していたっていうことです。

今でも、日本は国土の70%くらいが森林に覆われているのですけど、1万年以上前の縄文時代から、豊かな森林資源を活用してきたのです。石斧の時代から始まって、中国や朝鮮半島から技術が入ってきて、道具の種類が増えて、技術も向上していったのです。特に、平和が260年続いた江戸時代は、技術がいい方向に積み重なっていました、すごく幸せな時代だったと思います。



道具の進化っていうのも、建築の技術とすごく関係しているのです。

最初は石斧で、栗の木とか加工しやすい木を使っていたのですけど、鉄の道具が入ってくると、杉とかの針葉樹も使えるようになって、材料の幅が広がったのです。鉄の加工技術が進んで、道具の種類もどんどん増えていったのです。



ただ、昔はノコギリが未発達だったので、丸太をどうやって柱にするかっていうと、割って、それを削って使っていたのです。だから、木の目を見て、うまく割れるように選ぶっていうのがすごく大事だったので。

それで、法隆寺とか薬師寺みたいな大きな建築になると、「組み物」っていう技術が出てくるのですけど、釘を使わずに木と木を組み合わせて構造を作るっていうやつですね。でも、実は釘も使っているのですよ。力がかかる部分とか、斜めに力がかかるところには、ちゃんと釘が使われているのです。

その釘も、手で一本一本作られていて、純度が高くて、今の釘よりも性能がいいじゃないかって言われるくらいなのです。千年以上持っていて、修理のたびに再利用されているっていうのもすごいですよね。

道具そのものの記録っていうのはあんまり残ってないんですけど、絵巻物とか書物にはたくさん描かれているのです。例えば、鎌倉時代の絵巻には、大工さんたちがやりがんなどかノミを使って、みんなで力を合わせて建物を組み立てている様子が描かれているのです。

その中に「墨つぼ」と「差し金」っていう道具も出てきていて、これは奈良時代に中国から入ってきたもので、今でもほぼ同じ形で使われているのです。すごく息の長い道具ですよね。

でね、時代が進んで鎌倉とか室町時代になると、道具も進化してくるのですけど、社会の構造も変わってくるのですよ。

昔は大工さんが山に入って、木を選んで、製材して、加工して、建てるまで全部やっていたのです。でも、室町時代の半ばくらいから「製材業」っていうのが独立してくるのですね。つまり、大工さんが製材屋さんに頼んで、柱や板を手に入れるっていう分業が始まったのです。それに合わせて、道具も変わってきます。例えば「大鋸（おが）」っていう、縦に材料を引く大きなノコギリが中国から入ってきたのですけど、日本ではそれを一人で使えるように工夫して「前引き大鋸」っていう道具に変えたのです。これが昭和の初めくらいまで使われていたのですよ。



室町時代には「鉋（かんな）」も進化して、ハンドル付きのタイプが中国から入ってきて、それが日本で「押し鉋」になったのです。これが今でも使われている形ですね。

この頃になると、建築のスタイルも変わってきて、例えば京都の銀閣寺なんかは、和室の原型みたいな建物で、畳が敷き詰められて、柱があって、投げしがあって、っていう、今の日本建築のイメージが固まってきた時期なのです。

で、江戸時代になると、技術も道具もすごく充実してくるのですよ。

館内に展示しているのですけど、江戸時代の終わりに「岩次郎さん」っていう宮大工の方が、自分が建てた建物が完成した時に、使っていた道具を奉納してくれたのです。これってすごく珍しいことで、普通は弟子に譲ったり、バラバラになっちゃったりして、道具ってなかなか残らないんですよね。

でも岩次郎さんのおかげで、当時使っていた道具がそのまま残っていて、それを展示させてもらっているのです。見ていただくと分かると思うのですけど、現代の道具とほぼ同じ形しているんですよ。しかも、すごく吟味して選んで、自分の道具を大事に整えて使っていたっていうのがよく分かります。

やっぱり職人さんって、道具を大事にして、できるだけ長く使い続けて、手を加えていくっていう文化があるんですよね。それが日本の職人さんのすごく良いところだと思います。

明治時代になると、技術が西洋から入ってきて、特にドリルとか、電動工具が一気に普及していくんです。それで日本の手で使う道具も、だんだん整ってきて、今の形になっていくのですね。この頃から、大工さんの仕事のスタイルも変わってきて、昔は座ってじっくりやっていたのが、立って作業するようになって、みんなで協力して作るっていう形に変わってきたのです。

道具っていうのは、世界中にそれぞれの国の風土や文化に合わせて発展しているのですね。日本の大工道具って、特に「引き切り」のノコギリが特徴なのです。つまり、押すんじゃなくて、引

いて切るのです。これ、若い人にはちょっとピンとこないかもしれないけど、日本では普通なのです。

中国のノコギリは「押し切り」なんです。ヨーロッパもそう。押して切る。だから、海外の人から「なんで日本だけ引いて切るの？」ってよく聞かれるんですけど、実はこれ、材料の違いが大きいんです。

日本の木材って、密度が高くて、纖維が細かいんですよ。だから、引いて切った方が、より纖細に、きれいに切れるんです。それに、日本の刃物って、切れ味がすごく良いんですよね。だから、引いて切る方が合っているんです。

道具の使い方も違っていて、例えばヨーロッパでは「大は小を兼ねる」っていう考え方強いのですけど、日本では「作りたいものに合わせて道具を工夫する」っていう文化があるのです。だから、細かい作業には細かい道具、大きな作業には大きな道具っていうふうに、すごく道具の種類が多いんですよ。

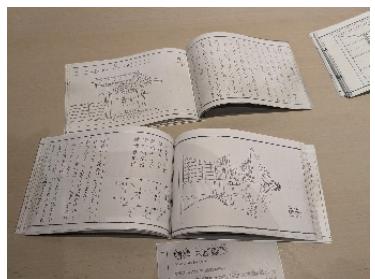
それが、日本の職人文化の特徴もあるし、道具に対するこだわりの深さもあると思います。で、木組みっていうのは、ほんとに日本の建築技術の象徴みたいなものなのですね。

釘を使わずに、木と木だけでジョイントを作るっていう技術で、「規矩術（きくじゅつ）」って呼ばれてます。これは、指矩（さしがね）とコンパスを使って、三次元の構造を二次元に置き換えて設計するっていう、すごく高度な技術なのです。

江戸時代にはこの技術がまとってきて、明治時代には「規矩術のマニュアル」っていう資料も出版されて、いろんな木組みの技法が一覧でまとめられているんですよ。日本人って、こういう資料を整理して残すのが得意なのですね。

木組みにはそれぞれ名前がついていて、丸太を縛るところから、細かい継手（つぎて）まで、全部に技術と工夫が詰まっているんです。しかも、強度があって、長持ちして、美しいっていう、三拍子そろった技術なんですよ。

今では、金物やプレカットで作られることが多いんですけど、元をたどれば、昔の匠たちの知恵と技術から生まれたものなんですね。



それに、木を余すことなく使うっていう考え方もあるって、「差し物」っていう小さな家具や、「組子（くみこ）」っていう装飾技術なんかも、全部木組みの延長線上にあるのですよ。

今は職人さんっていうのは、いなくなったわけじゃないんですけど、やっぱり食べていくのが大変で、昔ほど多くはないんですね。だから、技術をどうやって残していくかっていうのが、すごく大事なテーマになっています。

竹中大工道具館では、そういう職人技を記録するために、動画をたくさん作っているんです。例えば、「叶継ぎ」っていう、土台に使われる強度の高い継手の作り方を、腕のいい大工さんに実演してもらって、それを映像で残しているんです。

この継手って、寸法を正確に出さないと、いっぱいいつないだ時に長さがずれちゃうんですよね。だから、墨付けっていう作業がすごく重要なのです。墨付けっていうのは、いわば伝言ゲームみたいなもので、自分で刻むだけじゃなくて、相手に間違いなく伝えるためのものもあるんです。

それに、木って厚みがあって、丈夫にできているから、目に引っ張られて曲がるってことも少なくていいのですよ。よって、一本一本の木をどう使うかっていうのを、すごく考えて作っているのです。

最近はデジタルの技術も入ってきてるんですけど、やっぱり手仕事の精度っていうのはすごく高いんですよね。時間も早いし、仕上がりもきれい。雑にならないように、丁寧にやるっていうのが大事なんです。

竹中大工道具館では、いろんなワークショップもやっています。

例えば、木工の体験教室とか、刃物研ぎの教室とか、大人向けの本格的な道具の使い方講座なんかもあります。全部予約制なのですが、ホームページから申し込めるようになっていて、夏休みなんかは子ども向けのイベントもやっています。

最近は、道具に触れる機会ってほんとに少なくなっていると思うんですよね。よって、こういう場で実際に手で触って、木の香りを感じたり、削ってみたりするっていうのは、すごく貴重な体験になると思います。

それに、道具っていうのは、ただ使うだけじゃなくて、そこに込められた技術とか、職人の思いとか、そういうものを感じることができるものですね。だから、道具を通して文化を伝えるっていうのが、この館の大きな役割もあると思っています。

講演2 社寺建築の歴史と技術

日本工業大学 准教授 野口 憲治 氏



日本工業大学の野口と申します。今日は機械系の先生方の前でお話しするということで、なるべく分かりやすくスライドをまとめてきました。テーマは「日本建築と大道具」ということで、日本建築といえば、やっぱり木造建築、特に社寺建築が欠かせないと思います。限られた時間ですが、日本建築の歴史をかいつまんでお話ししていきます。

まず、私の専門は社寺建築ではなくて、オランダにある国立民族博物館の「シーボルト・コレクション」の研究をしています。シーボルトが日本に来た時に集めた町屋の模型があって、それを師匠から引き継いで研究しているんです。実際にオランダにも行って調査してきました。

その模型、犬小屋くらいの大きさなんですけど、室内を見ると、まるで和室のような精巧な作りで、建具や障子もきれいに作られているんです。モデルは長崎の町屋で、それを持ち帰って展示しているんですね。

最近は瓦の研究も始めていて、シーボルトが瓦の木型や実物を持ち帰っているので、それも調査対象になっています。大工道具もコレクションされていて、鉄工屋さんの様子を描いた絵とか、職人の絵図がオランダに残っているんです。

さて、日本の神社建築って、最初は建物がなかったんです。

例えば、和歌山県にある「上倉神社」というところでは、御神体は大きな岩です。つまり、神様が自然の中に宿るっていう考え方から始まっていて、最初は山とか石を拝むだけだったんですね。そこにやがて「拝殿（はいでん）」っていう、拝むための建物が出てくるんです。

埼玉にも「金鑽（かなさな）神社」っていう本殿がない神社があって、山そのものが御神体になっているんです。こういうのを見ると、自然崇拜から神社建築が始まったっていうのがよく分かります。

それで、神様っていうのは、鏡とか勾玉とか、いろんなものに宿るって言われていて、そういうものを納めるための小さな社（やしろ）がてきたんですね。やがてそれが「神輿（みこし）」になって、移動できるようになったりもします。

日本の古式神社建築には、代表的な三つの形式があって、

伊勢神宮の「神明造（しんめいづくり）」

出雲大社の「大社造（たいしゃづくり）」

住吉大社の「住吉造（すみよしづくり）」

この三つが基本形で、そこから全国に広がっていったんです。

伊勢神宮って、内宮と外宮があるのはご存じの方も多いと思いますけど、建物のつくり方としては、すごく特徴的なんですよ。

まず、ヒノキの白木を使って、色は一切塗らない。屋根は茅葺きで、直線的なデザインになっています。そして、柱は「掘っ立て柱」といって、地面に穴を掘って、そこに柱を直接立てるんです。これは縄文・弥生時代の住居の流れをくんでいるんですね。

それで、伊勢神宮では「真の御柱（しんのみはしら）」っていう、神様が宿る柱が地中に埋められているって言われています。普段は見られないんですけど、建て替えの時にだけ、その存在が意識されるんです。

伊勢神宮では「式年遷宮（しきねんせんぐう）」という儀式があって、20年に一度、神様と建物を新しい場所に移すんです。これが690年から続いている、前回は2013年、次回は2033年の予定です。

この式年遷宮って、ただ建て替えるだけじゃなくて、技術の継承の仕組みになっているんですよ。師匠が若い職人に教えて、その若い職人が次の世代に教える。こうやって技術が途切れずに伝わっていくのです。

しかも、伊勢神宮では山の管理もしていて、次の建て替えに使う木材をちゃんと準備しているんです。だから、建築技術を伝える体制がすごくしっかりしているんですね。

まず、出雲大社ですが、今ある社殿は江戸時代の1740年に建てられたもので、当時のものではないんですけど、かなり巨大な建築なんですよ。

平成の大遷宮のときの写真を見ると、職人さんと比べて建物の大きさがよく分かります。中でも「千木（ちぎ）」っていう部材は、長さが8メートルもあるのです。

昔の記録によると、古代の出雲大社は高さが48メートルもあったって言われているんです。今の建物でも24メートルあるので、それでも十分大きいんですけど、さらに昔はもっと高かった可能性があるんですね。

実際、平成12年の発掘調査で、三本の柱を束ねた巨大な柱の跡が見つかって、古代の言い伝えが本当だったんじゃないかっていう話になっています。それをもとに、建築士の先生方が復元案を作っていて、巨大なスロープがついた建物だったんじゃないかっていう説もあります。

次に、住吉大社ですが、伊勢神宮や出雲大社と違って、部屋が二つあるっていうのが特徴なんです。

この二つの部屋の構成が、天皇の代替わりのときに行われる「大嘗祭（だいじょうさい）」の仮設建築とすごく似ているんです。大嘗祭では、天皇が神様に食事を供える「悠紀殿（ゆきでん）」と「主基殿（すきでん）」っていう建物があって、住吉造の構成と重なる部分があるんですね。

だから、住吉大社は皇室の建築と関わりが深かったんじゃないっていう研究もあります。

さて、日本に仏教が入ってきたのは、だいたい6世紀の中頃、百濟（くだら）からって言われています。仏教と一緒に、建築の技術も入ってきたんですね。

仏教建築の基本的な構成は三つあって、

塔（とう）：仏舎利（ぶっしゃり）＝仏陀の遺骨を納める場所

金堂（こんどう）：仏像を安置する場所

僧坊（そうぼう）：お坊さんが修行する場所

この三つを配置して「伽藍（がらん）」っていう寺院の構成ができるんです。日本最古の仏教建築として有名なのが法隆寺です。聖徳太子が建立したとされていて、世界最古の木造建築とも言われています。実は一度焼失して、今ある建物は再建されたものですが、それでも飛鳥時代の技術が色濃く残っているんです。



法隆寺の建築には、仏教建築ならではの特徴がいくつかあります。

礎石建て：柱を地面に直接立てるんじゃなくて、石の上に立てる

エンタシス柱：柱の真ん中が少し膨らんでいる形。ギリシャの神殿にも似ています

瓦屋根：それまでの茅葺きと違って、重い瓦を使うことで構造が変わる

朱塗り（しゅぬり）：柱や壁に赤い塗料を使う。日本建築では珍しい色使い

こういう要素が、大陸から伝わってきた建築様式なんですね。

仏教建築が日本に入ってきたことで、それまでの神社建築とは違う技術やデザインが導入されました。でも、それがそのまま使われたわけじゃなくて、日本の気候や文化に合わせて、だんだん“日本化”されていったんです。

例えば、屋根の話なんんですけど、日本は雨が多いですよね。だから、屋根の「軒（のき）」を長く出して、建物を雨から守る必要があるんです。でも、軒を長くすると、日が入りにくくなるし、屋根の勾配も緩くなって雨漏りしやすくなる。

そこで登場するのが「跳ね木（はねぎ）」っていう技術です。これは、屋根の端を支えるための部材で、屋根の勾配を調整しながら、軒を水平に長く伸ばすことができるんです。これによって、日本らしい、ゆったりとした軒先のデザインが可能になったんですね。

この跳ね木の技術が発展すると、「小屋裏（こやうら）」っていう天井裏の空間ができる、そこに構造材を入れて、屋根全体を支えるようになります。これが「野屋根（のやね）」っていう構造で、法隆寺の建築なんかがその代表例です。

さらに時代が進むと、屋根の構造がどんどん合理化されていくって、部材の配置や力の伝え方がすごく計算されるようになります。例えば、「六仕掛け（ろくしかけ）」っていう設計法では、屋根の部材の間隔がきれいに揃っていて、建物全体のバランスが取れているんです。

こういう技術の積み重ねが、日本建築の美しさと機能性を両立させているんですね。

仏教建築が日本に根付いていく中で、最初は大陸風の装飾が多かったんですけど、だんだん日本のデザインに変わっていくんです。

例えば、法隆寺の建築では、柱の形が「エンタシス」っていって、真ん中がふくらんだギリシャ風の形なんですけど、時代が進むと、そういう装飾がだんだん控えめになっていきます。

薬師寺の建築なんかを見ると、手すりの模様がシンプルになっていたり、組物（くみもの）っていう屋根を支える構造も、より合理的ですっきりした形になっているんです。法隆寺の頃は、遠くにひじ木を出して軒を支えていたんですけど、薬師寺ではそれが手前に引っ込んで、細かい部材を積み重ねて力を伝えるようになっているんですね。

それに、部材の配置も整ってきて、「等間隔」で並べるようになって、見た目にも美しく、構造的にも安定するようになっています。こういう合理化って、日本人らしい几帳面さとか、美意識が反映されていると思うんですよ。

あと、屋根の先端の「たる木」の本数も変わってきて、最初は一本だったのが、雨の多い日本では二本にして、より軒を長く出せるように工夫されているんです。こういう細かい技術の積み重ねが、日本建築の美しさと機能性を両立させているんですね。

仏教建築が日本に根付いていく中で、空間の使い方にも大きな変化が出てきます。例えば、東大寺の「法華堂（ほっけどう）」っていう建物があるんですけど、これ、左右で時代が違うんですよ。左側が奈良時代、右側が鎌倉時代の建築で、二つの建物を合体させて一つの屋根で覆っているんです。

この構成が「並び堂（ならびどう）」って呼ばれていて、仏様がいる空間の前に、人が拝むための空間を追加して、それを一つの屋根でまとめるっていうスタイルですね。このとき、屋根をどうやって支えるかっていうと、さっき出てきた「跳ね木（はねぎ）」を使って、屋根の端を持ち上げて、水平に長く伸ばすんです。これによって、雨をしっかり流せる勾配を保つつつ、軒先はゆるやかで美しいラインになるんです。

この技術が発展すると、「小屋裏（こやうら）」っていう空間ができる、天井を張ることが可能になります。つまり、屋根の構造が複雑になって、建物の中の空間もより豊かになっていくんですね。こうして、日本建築の特徴である「奥行きの深い空間」が生まれていったんです。

さて、ここまでいろいろお話ししてきましたが、最後に私が一番伝えたいことは、「日本の建築は屋根から生まれた」ということなんです。

神社建築は、自然崇拜から始まって、やがて仏教建築が入ってきて、それに対抗するように神社建築も発展していました。伊勢神宮の式年遷宮を見ても、技術の継承がしっかりと仕組み化されていて、建築の伝統が守られているのが分かります。

そして、仏教建築が入ってくることで、瓦や礎石、朱塗りなどの新しい技術が導入されて、それが日本の風土や美意識に合わせて変化していきました。特に屋根の技術は、日本建築の中でも重要な部分で、雨の多い気候に対応するために、跳ね木や小屋裏の工夫がされて、軒先の水平ラインを美しく保つことができるようになったんです。この「軒先の美しさ」っていうのは、日本建築の象徴とも言えるもので、例えば浄土宗の「淨土堂」なんかを見ると、軒先がすごくゆるやかで、水平を強調したデザインになっていて、私は個人的にすごく好きなんです。

つまり、日本建築っていうのは、屋根の技術を中心に発展してきたと言っても過言ではないと思っています。

講演3 技能五輪全国大会建築大工部門への挑戦

日本工業大学大学院工学研究科

建築デザイン学専攻 川嶋 涼太 さん



こんにちは。日本工業大学の川嶋です。今日は「技能五輪全国大会 建築大工部門への挑戦」というテーマで、これまでの経験や取り組みについてお話しします。

技能五輪全国大会は、原則 23 歳以下の若い技能者を対象にした大会で、全国の青年技能者が集まり、技術を競い合います。技能に触れる機会を提供し、技術の尊重や普及を目的としています。

競技職種は全部で 41 あり、機械系、建設・建築系、電子技術系、情報通信系、サービス・ファッション系などに分かれています。私が挑戦している「建築大工」は、建設・建築系に含まれています。

建築大工部門の競技内容

この部門では、木造建築物を建てるために必要な技術や仕上がりの美しさが求められます。課題は、複雑な形状の木造小屋組の一部を制作するというものです。

作業の流れは以下の通りです：

原寸図の作成

部材の削り出し

見つけ（部材の位置合わせ）

加工

仕上げ

組み立て

競技時間は 2 日間で合計 12 時間です。12 時間と聞くと「意外と余裕あるのでは？」と思うかもしれません、原寸図の解読だけでも 1 週間以上かかることがあります。特に 2021 年や 2022 年の課題では、側面図や表面図を描いてから部材展開図を作成する必要があり、かなり時間がかかりました。

建築大工というと、削りや組み立てが目立ちますが、私が一番重要だと思っているのは「墨つけ」の作業です。ここで少しでもズレてしまうと、隙間ができてしまい、完成度に大きく影響します。だからこそ、墨つけの精度には特にこだわっています。

私は 2002 年 5 月生まれで、群馬県出身です。実家は左官屋を営んでいて、建築とはほとんど関わりがありませんでした。ただ、ものづくりが好きで、左官屋の手伝いをする中でその楽しさを感じていました。

本格的に建築に関わり始めたのは高校からです。2018 年に建築科のある高校に入学し、建築研究部にも所属しました。高校 1 年の夏には建築大工技能士 3 級の検定を受けて取得し、県大会のものづくりコンテストにも出場して 3 位になりました。

その後も関東大会に挑戦しましたが、時間制限が厳しく、完成させるのに必死でうまくいきませんでした。

高校 2 年の 2 月には建築大工技能士 2 級の検定を受けました。この検定は技能五輪全国大会の予選も兼ねていて、群馬県予選を通過し、技能五輪への挑戦が始まりました。

高校3年では、若年者ものづくり競技大会にも出場し、木材加工部門で敢闘賞を受賞しました。初めての技能五輪全国大会では、課題の一部が前日に変更されるというハプニングもありましたが、なんとか対応できました。ただ、細かい部分でミスがあり、賞には届きませんでした。

2021年に日本工業大学に入学しましたが、設備や指導者が整っておらず、挑戦が難しい状況でした。そこで、当時の学科長・三坂教授に相談し、練習場所や時間の確保をしていただきました。指導は高校時代の先生・樋口先生にお願いし、群馬からわざわざ来ていただいて教えてもらいました。

大学では初めての挑戦ということもあり、誰も勝手がわからず、練習も思うようにできませんでした。その結果、初年度は惨敗でした。

大学2年では「木工サークル」を立ち上げ、仲間と一緒に活動を始めました。家具づくりにも挑戦し、建築大工の技術が家具にも活かせることを実感しました。

若年者ものづくり競技大会では、建築大工部門で優勝し、厚生労働大臣賞をいただきました。

技能五輪全国大会には4年連続で出場し、最終年の課題は特に難しく、当日変更された部材が7本もありました。原寸図の精度が勝敗を分けるポイントでしたが、細かいミスで入賞を逃しました。

高校時代は朝7時から夜9時まで練習漬けの日々で、運動部並みの生活でした。大会に向けての練習は厳しく、未完成で終わることもあり、何度も心が折れそうになりました。

それでも続けられたのは、ものづくりが好きだったからです。うまくできたときの嬉しさが原動力でした。

大学では環境が整っていない中でも、先生方や仲間の協力があり、挑戦を続けることができました。設備よりも、人の協力が何よりも大切だと実感しました。

最後に、努力は必ず報われるとは限りません。でも、続けていれば、いつか報われるかもしれない。そう信じて、私はこれからも好きなものづくりを続けていきたいと思っています。

これまで支えてくださった先生方、両親、仲間たちに心から感謝しています。ありがとうございました。